

2015（平成27）年度 京都大学 入試問題 文系 第2問 解答例

問一

誕生を喜び祝い、死を悼むことは、普遍的な人心の自然の動きであるから、他者に対する薄情な冷淡さはほめられないが、長年多くの体験を重ねて老いた今、自身の心の動きが若干緩んで鈍るのは、やむを得ないであろうということ。

問二

数年来親しい人が頻繁に亡くなり、その数がもう少し減ってほしいが、それほどまで親しい人が多いわけでもなく、何より人の死は自然の道理で、減らしようもないということ。

問三

親しい者の死に際会することの稀な青少年期の、まともで素直で心底からの致命的なほどの痛撃を、老年に至るまで経験し続けて生きていられるとは思えず、仮にも可能であれば人間業ではなく、筆者には無理であるということ。

問四

故人の有様が具象的な光景としてありありと想起されるなら、自衛本能で死に対する厳粛な情は次第に希薄になり、筆者は楽しく愉快的な交際のみ思い出すと推測されるから。

問五

筆者は、青少年期には親しい人の死を率直に悼み、苦痛を覚えたが、老いた今、心身への傷害を無意識に回避する自衛本能により、故人との交際で楽しく愉快的なことだけを具象的に想起する。そのことへの反省も自責も一切なく、むしろ安らぎを覚えることで有難いと受け止めるようになった。